

【書評】

Ajit Sinha, *A Revolution in Economic Theory: The Economics of Piero Sraffa*

Palgrave Macmillan, 2016, xv + 244 pp.

ピエロ・スラッファは、30年以上の思索の末、1960年、『商品による商品の生産—経済理論批判序説』を著す。この本は大きな反響をよぶが、スラッファはそうした反応には沈黙を守り、その理解を読者に委ねた。本書はこの謎めいた本の第一部 単一生産物産業と流動資本を中心に、スラッファ経済学の核心を明らかにしようとした研究書である。

本書の特徴は3つある。1つはスラッファの業績を年代順に検討し、『商品による商品の生産』に結実していったプロセスを明らかにしようとしたこと、2つは、スラッファは寡作の人で、公刊された文献だけでは彼の真意をつかむことが難しく、著者はスラッファ・ペーパーズ（スラッファが残したノートや覚書）の研究を通してスラッファ経済学の核心を解明しようとしたこと、3つはスラッファ経済学を正確に理解するためには、彼の哲学を理解することが必要であるという考えから、主流派経済学と異なるスラッファの哲学（方法論）を基礎に据えたことである。

本書の主題は『商品による商品の生産』にいたる思考過程、とりわけ標準商品の理論が出来上がるまでを明らかにすることにある。以下ではこの点に焦点を絞って著者の考え方を紹介したい。

1927年夏、スラッファは価値論講義のための講義ノート、'Notes: London, Summer 1927'を準備するが、著者はそこに新古典派経済学と決別し、古典派経済学を基礎に据えようとする方法論上の転換を認める。著者によれば、スラッファは、価値の究極的な原因を考察するためには、価格比率を機械論的に

（因果関係として）説明する新古典派経済学は役に立たず、幾何学的説明を構築する必要があると考える。また、確実な基礎をもたない人間心理から導かれる需要理論や「限界における観念的变化である観察不可能な」(xii) 限界分析は価値の決定に際しては取り除かれるべきだと考えるようになる。方法論を確立したスラッファは、'Winter 1927-28' (D3/12/5:2) において、剰余が存在しない経済体系を次の「方程式」によって表す。

$$A = a_1 + b_1 + c_1,$$

$$B = a_2 + b_2 + c_2,$$

$$C = a_3 + b_3 + c_3 :$$

$$A = \Sigma a, \quad B = \Sigma b, \quad C = \Sigma c$$

著者によれば、この連立方程式には相対価格が示されておらず奇妙な式に見えるが、これは価格の究極的原因（「絶対的価値」）を明らかにしようとする価格方程式であり、またこの方程式は左辺から右辺へ（生産されたものが各部門にどのように需要されたかを示す）生産の因果関係を表す需給均衡式とみなすのは間違いで、経済体系の幾何学的説明（経済体系を写し撮ったいわば瞬間写真）と理解すべきであるという。この方程式に対して、フランク・ラムジーが、この方程式では剰余生産物が存在する場合には一意な答えが得られないというコメントをよせる (D3/12/2:28)。ラムジーのアドバイスもあり、「生産で使用されたすべての投入の、全体としての集計が産出と同じ割合で増加する」(53) 経済体系を仮定し、「均等な剰余率」という考え方に行き着く。これは後に標準体系に発展する画期的なアイデアだと著者は評価する。その後

10 年近くの中断を経て、スラッファは再びこのアイデアに立ち返る。著者は、1942 年 8 月付のノート、'Model & Period of Production' のなかの次の一文に着目する。「モデルに要求されていることは、 $(r$ の変化に対して) 資本対生産量の間比率が一定となることを示すことであり、もしこの比率を構成することができ、それが一般的に証明されるならば、一連の重要な『帰結』が導かれるだろう」(D3/2/16:14)。この文章はさらに、集計式 $(A_q p_a + \dots + K_q p_k)(1+R) = A p_a + \dots + K p_k$ において、極大利潤率 $(=R)$ が分配率 $(r$ および $w)$ の変化にかかわらず一定の値を取り得るかどうかという形に言い換えられ、問題の所在が明確となり、これが「仮説」(1944 年 1 月 27 日の覚書)と呼ばれるスラッファの核心的命題につながると著者はいう。つまり極大利潤率が分配率の変化にかかわらず一意の値をとるかどうかの問題の核心であり、スラッファは問題解決の糸口にたどり着いたと著者は考えるのである。そしてこの問題はベシコヴィチの数学的助力を得ることで解決され、最終的な解答が『商品による商品の生産』第 5 章標準体系の一義性において示されることになるという。

著者の解釈に同意できないスラッフィアンは多くいると思うが、ここでは次の点を指摘しておきたい。スラッファが取り組んだ問題は、どのような生産体系であれば正の標準比率が一意に存在するかであって、これは数学的にいうと、非負の固有ベクトルとそれに伴う非負の固有値の存在を証明する問題にほかならない。この問題は 1907 年にペロンが正行列について、1912 年にフロベニウスが分解不能な非負行列の場合について証明に成功

している。スラッファはこうした研究成果を知らずに、この問題に取り組んだため、極大利潤率の一意性は q 体系の構成をまって初めて明らかになるのだという考えに到達するまで試行錯誤を繰り返したのである。著者は、極大利潤率の一意性と q 体系の構成が不可分の関係にあるということに留意しておらず、スラッファの混乱を引きずっている。著者が §37 (標準体系への変形は常に可能である) よりも §41 (正の乗数の一義的組合せ) を不必要なまでに詳しく解説している (208-12) のはそのことの反映だと思われる。著者はスラッファ後の研究成果を無視している。しかし著者がこうした批判を受け入れるとは思われない。というのは、2008 年マルコ・リッピがスラッファの標準商品の存在証明には不備があるという指摘をおこなったが、これに対して著者は「スラッファが用いた数学は構成主義者 (constructivist) の数学であって『ネオリカーディアン』が用いる形式的な正統派数学ではない…スラッファの証明は『構成主義者』の観点からは完璧なものである」(212, 脚注 14) と述べ、数学の使用を拒否し、リッピの批判を退けているからである。

「スラッファの書物が出版されて 50 年以上、またスラッファの保存文書が公開されて 20 年以上も経過しているが、スラッファ理論の中心部分がスラッフィアンの文献のなかでいかに不十分な形でしか理解されていないかを明らかにしたかった」(144) とあるように、本書はスラッフィアンに対する挑戦の書である。著者に賛同するかどうかはともかく、この書がスラッファ経済学の理解を深めるきっかけになることを期待する。

(宮本順介：松山大学)